≪書評≫

山本伸・西垣内磨留美・馬場聡 編著

『ブラック・ライブズ・スタディーズ：BLM運動を知る15のクリティカル・エッセイ』

（三月社、2020年、296頁）

峯　真依子

ジョージ・フロイド氏の死からわずか6か月後の2020年11月に緊急出版された山本伸・西垣内磨留美・馬場聡編著によるこの本の帯には、＜BLM（ブラック・ライブズ・マター）運動とその背景となる歴史・文化を理解し、今も続く構造的・制度的レイシズムに抗うためのカルチャー評論集＞とある。このタイミングで、このタイトルにそそられないわけがない。BLMに至るまでの歴史的背景を一般読者に伝えるスタンスをとりながら文学・映画・ポップカルチャー批評をダイナミックに展開させる。

山本伸氏による「偉大な国の未熟な文化―リンチと銃と原爆と」は、南北戦争後にアフリカン・アメリカンがそのターゲットとなっていったリンチの歴史を詳らかにする。また民衆が鬱憤晴らしの機会として機能したリンチは、死刑制度がその後その役割を果たしていった可能性、さらには警察による過度な権力行為も群衆が望む「正義」をかつてのリンチの代替行為として行った可能性を示唆している。

西垣内磨留美氏の「階層と差別の重層構造」は、ゾラ・ニール・ハーストンの連邦作家計画での経験を導入部とし、アルンダティ・ロイ『小さきものたちの神』とハーパー・リーの『アラバマ物語』を論じる。差別という普遍的な問題を、人種、南部とインドのカースト、植民地主義の中から繊細に掬い取る。興味深いのは、勝者の論理に陥ることのない、だが差別から解放された地平として、敢えて不安の中にわれわれが回帰し続けることを示唆している点だろう。

ハーストンの故郷イートンヴィル保存協会専務理事N・Y・ナシリ氏は、「ジョージ・フロイドの死をめぐって思うこと」で、公民権運動の抗議の結果得た最初の職と、町の中心を走るはずだった高速道路計画の白紙化の運動を振り返り、抗議することが実際に自分の人生とコミュニティをどう変えてきたかを伝える。変革の可能性についての信念のもと、BLMを見守っている。

加藤恒彦氏は、「第二の公民権運動としての『ブラック・ライブズ・マター』運動―黒人の二極分解を乗り越え、真の平等を求めて」で、両方の運動に関して、この本の核となる事実関係と歴史的背景を提供する。非常に手際よくまとめられているため、公民権運動とBLMについての基本的な知識を必要とする一般読者や学生らにはここから読むことを勧めたい。

田中千晶氏「受け継がれる尊厳―ダグラスからキング、そしてオバマへ」は、数々の自伝を「尊厳」をキーワードにたどるダイナミックな寄稿となっている。イデオロギーではなくテキストから正確に「尊厳」の意味を読み解くことで、BLMを次世代にも続く大きな社会変革に結びつけようとする。歴史上の人物達の痛みと挫折が、今私たちにどんな強さを持てるかを問うてくる。

永尾悟氏の「世界と私の間に―リチャード・ライトの自己表現への渇望」は、ライトが、この国の人種的暴力と死への恐怖という黒人としての共通体験を書くことと、人種の制約を越えた自己の表出との間で葛藤したことを浮き彫りにする。果たしてライトの苦悩は本当に過ぎ去りし過去なのか否か、つい考え込んでしまった。

一方、清水菜穂氏によって再読されるジェイムズ・ボールドウィンは「黒人作家」としての自らの役割を追求した作家だった。この「ジミーよ今生きていたら何を思う？」の章は、ジョージ・フロイド事件、その後話題となった「白人の特権」へと議論を展開させ、文学とBLMが最良の形で著される。しかもボールドウィンにしたためた手紙のスタイルをとっており、読者がそれを盗み読みするような面白さ。BLMをめぐり、様々な作家に手紙を書くシリーズが作れそうだという妄想まで広がるおまけ付きである。

ハーン小路恭子氏の「人種表象のセンチメンタリティに抗して―『ダンボ』と「ピンクの象のパレード」」は、無邪気なファンタジー映画の化けの皮を一枚一枚剥がすように論が進められ、ディズニー映画のセオリーと相いれないピンクの豚のシーンにある興味深い破綻に感傷物語のクリシェからの突破口を見出す。ダンボが青い目であることへの言及がないのは不思議な気がしたが、顔のない黒人の描写をはじめBLMを考えるための事例に富む。

三石庸子氏の「アーロン・マッグルーダーの『ブーンドックス』―黒人問題を内部から描くコミックスとアニメ」は、何も奇を衒ってはいないのに最初から最後まで抱腹絶倒。マッグルーダーの持つ乾いた批評眼の魅力が臨場感をもって紹介される。BLMがかつての公民権運動とは性質が異なり、良い意味で決して一筋縄ではいかないことが彼の発言と作風から予言的に示唆される。

鈴木繁氏の「ジョン・ルイスのBLM（ブラック・ライブズ・マター）運動における遺産―視覚的・物語的メディアとしてのコミックスとの関連から」は、日本でも話題になったジョン・ルイスと公民権運動を描いた『March』を論じる。ユニークなのは、公民権運動が歴史ではなく、BLMと同様今ここで起きている何かとして語られている点。これこそが、コミックというメディウムのなせるわざか。著者のデジタル・ネイティヴの世代と社会運動への言及も興味深い。

川村亜樹氏の「ポスト人種とヒップホップ」は、BLMの初期2015年前後のヒップホップ文化から、アメリカ社会のポスト人種への期待と挫折を読み解き、人種が存在しない・させないという「ポスト人種」の言説自体が、皮肉にも差別が存在することを隠ぺいする可能性を危惧する。とくにケンドリック・ラマー「オールライト」のミュージックビデオの分析が示唆に富む。

西田桐子氏による「日本における黒人の運動に対する共感と黒人イメージの変化―小説西野辰吉『米系日人』（一九五二）の黒人表象を中心に」は、随所に新しい発見を与えてくれる。日本文学において黒人が抑圧に抵抗する運動家・革新的な芸術家といったイメージが1950年代初頭から付与され、かつ共感を得ていった過程を丁寧に追う。日本からBLMに加わることの我々の立ち位置も考えさせる。

平尾吉直氏の「お玉杓子はジョン・ブラウンの子―替え歌としての『ジョン・ブラウンの屍』」は、日本で誰もが知るあのメロディが、じつはアメリカの奴隷制度と深いつながりがあったことを、推理小説の謎解きのように、紐解いていく。ただBLMに興味を持ちこの本を手に取った多くの一般読者にとっては馴染みがないジョン・ブラウンが、一定の文脈をもって理解されるのは次の章になる。

馬場聡氏による「『海底二万里』のテロリスト―ジュール・ヴェルヌの奴隷制批判」は、作品分析と並行しアメリカからフランスのBLMにまで視野を広げる。実はネモ船長の居室に飾られていた奴隷解放の殉教者ジョン・ブラウンの銅版画、そしてBLMの拠点のひとつとなったワシントン州シアトルはキャピトルヒル地区の左派自営集団

がブラウンの名を掲げていたという事実。時代も国も越えて徘徊する「ジョン・ブラウンの亡霊」からBLMの広がりを捉えなおす。

北島義信氏の「人種差別と欧米型近代」は、欧米型近代に顕著に見られるという「二項対立的」思考とは異なる、人種差別を越えて人類が共生できる道を模索する。BLMには多くの白人が参加し、多くの警官も片膝をついて講義を表明したことに、普遍的人間性への希望を見出す。一つの成功例としてアパルトヘイトを打破した「ウブントゥ」という土着思想が紹介される。

こうしてタイトルにある通りBLスタディーズという学問がこの本から、そしてひょっとすると世界で初めて日本から始まったことになる。日々刻刻と変わる政治状況の中で、何よりこの短期間に出版にまでこぎ着けた今をときめく論者たちと、ベテランの研究者らの圧倒的な執筆・編集のスピードに、最大限の敬意を表したい。

惜しむべくは、たとえ説明の仕方とはいえ、第1章の銃とコメとの比較文化論の裏付けなしのトンデモ話のくだりは不可解であること。また日本のコメづくりを「家族愛」と結びつけることついても、家父長制の問題は無視できず反射的な居心地の悪さを覚える。この点については、読者をぐいと引き込む静かで強い怒りが集約された「はじめに」の秀逸さが救いとなっている。